山口大学経済学部東亜経済研究所の図書・資料と私

大　林　洋　五
Yogo　Obayashi

１．1960年秋，大学院に進学したばかりの私は，現代中国学会全国大会に出席するため，山口大学経済学部を初めて訪れた。大学４年の時，俺は実務には向いていないな，と，進路を決めて，一歩を踏み出したばかりであった。山口は静かな町で，町の真ん中の丘の麓に経済学部の古い木造校舎があり，キンモクセイが薫っていた。その一角に，戦後，閉鎖されていたが，再開されたばかりの東亜経済研究所の新しい建物があり，大会参加者に公開された。そこには，戦前の貴重な資料がたくさんあった。中でも，一番関心を集めたのが，毛沢東の『湖南農民革命』のパンフレットであった。参加者たちからの強い要望によって，主催校を代表して，上妻隆栄教授が，その日の午後の会の冒頭に，資料紹介を急遽行われたことを記憶している。私は，愛知大学で，霞山文庫の戦前の資料を見ていたが，またちがった資料がたくさんあるのに感心した。大会の日程は２日間であったが，３日めに，大会参加者に，若干の参加費を出せば，秋吉台，萩への観光バスが用意されていた。私もそれに参加した。その観光の最中に，浅沼社会党委員長への刺殺事件が報道された。山口は，私にとって，大きな印象を残した。その後，山口大学の中国関係の先生方とは，学会その他で面識を得た。1973年秋，山口大学経済学部でスタッフを公募しているのを知って，すぐ飛び付いた。

２．1974年春，山口に赴任した私は，平川の現キャンパスを見て，随分と昔と変わっているのに驚いた。キャンパスの統合移転の直後だったのである。とくに経済学部は，最後に移転したため，表側は，むき出しのコンクリートで，樹木は一本もなかつた。（今の木はその後，旧キャンパスから移したり，購入，寄附によって，植えられたものである）

東亜経済研究所は，研究室・事務室棟（Ａ棟）の３・４階に設けられていた。

研究所に出入りして，『後漢書』の和本が，移転してきたばかりで，コンクリートの床に縦積みになっているのに気付いたが，別に気にも留めなかった。たまたま，先輩の宮坂宏氏が，革命根拠地の法令，政策文献を収集・翻訳して，自費刊行している本が贈られてきた。その中で，国民党政権が，抗日派を弾圧するのを非難する文章のなかの言葉に？（出典不明）をつけているのに気付いた。たしかこれは，当時，民衆に人気のあった三国志のお芝居で，清流派の人々を弾圧する，宦官支配の後漢王朝を批判する言葉だったはず，と気付いて，その大本を調べるべく，後漢書を開いてみた。すぐ分かったが，大変に読みづらい，印刷もかすれていたので，どの刊本かと調べてみて驚いた。明の汲古閣の版だったのである。あるいは，幕末の山口明倫館以来の蔵書だろうか。今のように，中華書局の安い版がなかった時である。慌てて，事務の人達にその旨を伝えると，大変恐縮され，実は，『耕織図』も，表紙が木の版だったため，危うく忘れて，置き去りにされるところでしたと笑い話になった。

3．翌年秋，現代中国学会の全国大会が，また山口で開かれた。多くの先輩，友人が参加されたが，その際，東亜経済研究所の蔵書を見て，皆さん珍しい資料があると，感心され，大林はよいところへ来た，と羨望された。しかし，「ある物は見えるが，ない物は見えない」のである。自分のところになくて，山口にある物は，すぐ気付くが，自分のところにあって，山口にない物には気付かないのである。

山口で仕事を始めて，すぐに感じたことは，1940年代後半から1950年代前半の時期の資料が全然ないということだった。日本の敗戦，中華人民共和国の建国といった，現代史上最も重大な時期に，東亜経済研究所が閉鎖されていたためである。私自身は，日中友好団体や，日中貿易商社のブレーン的な役割をその当時果たしていた中国研究所に勤務していたため，比較的，この時期の資料を使っていたからである。その後，上妻，小嶋正巳，両先生を始め，関係者がそのブランクを埋めるよう努力したが，やはり，弱い点である。

4．キャンパス移転と山口高等商業学校設立70周年とを記念して，多くの先輩たちからの寄付によって，かなりの基金ができた。当時，文部省は，今と違って，そのような基金は目障りだったとみえ，寄附の趣旨に添って，早く使い切るようにとのことであった。寄付の趣旨には，東亜経済研究所の資料の充実も含まれていた。私は，赴任後，半年で資料担当の東亜経済研究所運営委員となって，その任務に就く事となった。新参者の私に，莫大な図書購入の任務を任せてくれた経済学部に感激したが，当時，中国は，文化大革命の最中で，めぼしい図書の出版は休眠状態であった。そこで，基本資料の欠落部分を台湾，香港の影印版で補充したりしたが，とくに，当時，アメリカのアジア研究各機関が，蔵書目録を発行していたのを購入した。アメリカ国会図書館，カリフォルニア大学(Berkeley)，シカゴ大学，ハーヴァード大学，ミシガン大学，スタンフォード大学である。大部で，高価であったが。それは，一機関がいかに図書を集めても，限度があり，他機関の蔵書を知ることが重要と考えたからであった。（インターネットで，他機関の蔵書をすぐ調べることができるようになったのは，この十年以上後のことである）

5．私が山口へ来てから，先輩や，友人から「お前のところには，……の図書があるはずだが，調べてくれ」という依頼が来るようになった。それは，『紀元2600年記念・山口高等商業学校・東亜関係図書目録』に基づくものであった。しかし，それらの依頼の半分以上は，期待に添えなかった。私が探してもないのである。戦後すぐ，進駐軍が山口高等商業学校にやってきて，資料を大量に接収していったというのである。その大部分は，後日返還されたが，帰ってこなかったものもあった。翌々年に備品の紛失・除籍の手続きが採られたが，その除籍図書の大部分は，この際に接収されたものであろう。

アメリカの各機関の図書目録を調べている際に，アメリカCongress Libraryの蔵書目録に，山口高等商業学校の紛失図書と同じものがかなりあるという事に気付いた。そのうちに，「アメリカ国会図書館で，……の本を見たが，山口高等商業学校の蔵書印があったぞ」と報せてくれる人が，何人か現れた。いささか腹が立ったが，反面，安心もした。さすがにアメリカ人，無駄に散逸させてはいない，とわかったからである。日本も，フィリピンのアメリカ政府諸機関，ベトナム等（フランス領インドシナ）のフランス政府諸機関，インドネシア（オランダ領東インド）のオランダ政府

諸機関，マラヤ，シンガポールのイギリス政府諸機関等の資料を接収したはずであるが，それらの資料がどこへ行ったのか，全くわからないし，それらの資料を使って，立派な研究がなされたとも聞いたことはないからである。

6．1900年の義和団の乱（拳匪の乱）の失敗以降，清朝では，近代化を急ぎ始めた。とくに，1904-5年の日露戦争に日本が勝利してからは，日本に見習って，西洋の法制を取り入れなければならないというのが，一般的となった。1900年当時の，守旧派，変法派，洋務派の党派的対立が収まったわけではないが，どの派も主張は同じになった。いわゆる第二洋務運動である。西太后と光緒皇帝が，同時に逝去して，宣統の年号になってからは，国会開設運動が広がり，清朝も，日本に見習って，十年後に国会開設を約束した。この時期に，日本の憲法その他の法律書など，中国語に翻訳，解説した図書もたくさん出版された。私が，山口へきてじきに，福島正夫先生が，早稲田大学の歴史を書く参考に，日本人学者の法律書で，第二洋務時代に中国語訳されたものの，現物があるか，調べてほしい，と手紙をいただいた。調べたが，見当たらず，その旨，お答えした。ところが，数年後，蔵書目録を作るための，書名カードつくりの作業が，終盤に近づいた頃，「移転の際，段ボールに詰めておきましたが，全く閲覧の請求もないので，そのままになっている本がありますが……」といって，見せてくれたのが，まさにこれ。福島先生に嘘の返事をした事になった。

7．1970年代後半には，東亜経済研究所を官制化する運動が，随分行われた。＜東亜経済研究資料センター＞とか，いろいろなプランが出され，山口大学ばかりでなく，中国地方の諸国立大学の，あるいは中四国の諸国立大学の，あるいは旧高等商業学校系の諸国立大学経済・経営・商学部の，共同要求として，文部省へ，さらには政府への要求がなされた。その目玉が，貴重な蔵書にあるというわけで，次々と訪れる文部省の高級役人や，ナントカ審議会，委員会の先生方を東亜経済研究所へ案内して，蔵書の説明をする役（つまりホラフキ係）をおおせつかった。結局，全く徒労であったが。もっとも，このホラフキ係，大学院設置，国際経済学科設置，などの際にも駆り出されたので，それには，すこしは役立ったのかもしれない。

8．大林も，そろそろ蔵書の処分を考えねばなるまいと，考えた時，収入の大半を注ぎ込んで集めたとはいっても，市場価値は大した事はないし，やはり，東亜経済研究所に引き取ってもらうのが最上と思った。幸いに，寄付の申し出を受け入れていただいたので，整理できた分から，04年春からぼつぼつ納めている。これは，既存の東亜経済研究所の蔵書との重複は極めて少ない，そして，補完関係が強いのが特徴。重複が少ないのは，大林が，しょっちゅう東亜経済研究所の書庫に籠っていたから。補完関係が強いのは，第一は，大林の主な関心が，中華人民共和国の形成期にあったため，その時期の資料をとくに集めた事。東亜経済研究所の資料の一番弱いところを補った。第二に，3冊で1セットの文献のうち，2冊が既存だったのを，残りの1冊を古本屋で大林が見つけだした，といったのが結構，幾つかあるという事。とくに，出版社が変わっているような場合，それに関心がある人でないと，セットに気付かないから。だから，文庫としてまとめるよりは，既存の資料と一緒に並べた方が，多分，使いやすい。

外部の人に，東亜経済研究所の蔵書内容を知っ

てもらうには，前述の『紀元2600年記念・山口高等商業学校・東亜関係図書目録』であるが，上記のような事情で，目録に掲載されていても，実物がすでにないものがあり，もちろん，戦後，再開されてから購入･寄贈による資料もある。また,『紀元……』では,すでに「日本領土」であった台湾･朝鮮に関する資料を省いている。また，欧文の文献目録も作られなかったので，これらを補完・改訂する必要ができたため,新しい目録を編纂した。これが,

『山口大学経済学部東亜経済研究所　東亜関係蔵書目録（1981年３月末現在)』

「和漢書分類の部」1988年３月刊

「和漢書書名索引の部」1989年３月刊

「洋書の部」1989年３月刊

「和漢書著者名索引の部」1990年３月刊

「中国語発音順索引の部」2002年３月刊

の全５冊である。

出来あがってみると，監修はかなり乱雑で，赤面するところがあり，それらの整理・訂正も必要である。また，1981年３月末現在であるが，人民共和国では，この時期から，爆発的に出版が盛んになり，当然に購入図書も多い。その意味で，かなり，不完全なものとなった。